

第一章 帳簿の誤り

台所の竈の火が落ち着いた頃、私はまだ奥の小部屋で帳簿を開いていた。米の出入り、野菜の値段、味噌の残量。花嫁修行として新撰組の食事係を仰せつかって三ヶ月、私は毎日これを欠かさなかった。数字は嘘をつかない。きちんと合わせれば、隊士たちの腹も、隊の懐も、両方を守れると思っていた。

だが今日の数字は、どうしても合わなかった。

二朱、足りない。

何度計算し直しても、同じだった。昨夜、近藤局長が急な来客を招いたときの酒肴を、私は急いで記帳したはずだった。手元の紙を指でなぞり、墨の跡を確かめる。間違えた箇所が、どうしても見つからない。

「花奈乃」

低い声が、障子の向こうから落ちてきた。

私は筆を置いて立ち上がった。土方歳三副長だ。あの人の声は、どんなに静かに呼ばれても、胸の奥まで届く。襖を開けると、廊下の明かりの下に黒い羽織が立っていた。整った顔立ちに、切れ長の目。口元はいつも薄く結ばれている。

「帳簿を持ってこい」

「はい」

小部屋に戻り、帳簿を抱えて土方の部屋へ向かう。副長の部屋は本陣の奥、香りの少ない沈静とした空間だった。机の上にはすでに別の帳簿が開かれており、私の書いたものと見比べられているのが分かった。

「座れ」

座布団を勧められるでもなく、私は畳に跪いた。土方が帳簿を一枚、ゆっくりめくる。指先が紙を撫でる音だけ聞こえる。

「一昨日の夕餉。豚肉を三斤と記しているな」

「はい。市場で……」

「市場の札は二斤半だ。半斤分、お前の帳簿だけが多い」

私は息を呑んだ。確かに、あの日は雨で値が上がると聞いて、少し多めに買ったつもりだった。だが札を写すときに、私は丸めてしまったらしい。

「申し訳ありません。急いでいて、確認を怠りました」

「急いでいた、か」

土方は帳簿を閉じた。視線が、私の顔ではなく、跪いた私の膝元に落ちる。

「隊の金は、隊士の命と同じだ。一朱の誤りが、いつか誰かの腹を空かせる。お前はそれを分かっているか」

「分かっております」

「分かっているなら、なぜ間違えた」

言葉が出ない。土方は立ち上がり、私の前に立った。黒い袴の裾が、私の視線のすぐ近くで揺れる。

「顔を上げろ」

言われるままに顔を上げる。土方の目は、怒っているというより、冷たく観察していた。私の唇、喉、胸元の合わせ目まで、一つずつ確かめるような目。

「花嫁修行のつもりで来たのだろう。料理は上手い。隊士たちも、お前の味噌汁を気に入っている。だが数字を疎かにする女は、台所に置く価値がない」

「もう二度としません。どうか……」

「どうか、ではない」

土方は机の引き出しから、細い紐を取り出した。帳簿を縛るためのものではない。私の手首を見る目つきで、それが分かった。

「今夜、罰を与える。帳面の誤りは、体で覚えさせる」

「体、で……？」

「襖を閉めろ。声は出すな。出せば、罰は倍になる」

手足が震えた。それでも私は立ち上がり、襖を閉めた。鍵はない。ただ、閉めたという事実だけが、この部屋を外界から切り離す。土方は座ったまま、私を見下ろしていた。

「そこへ立て。帯を解け」

「副長……」

「土方、でいい」

「土方さま……帯を、ですか」

「解け。早くしろ」

指先が滑る。帯を解くと、着物の合わせがゆるむ。土方は動かない。ただ見ている。私は自分の胸が、襦袢の上からでも形を変えているのを感じた。乳首がすでに硬くなって、布に触れていた。恥ずかしい。こんなことで反応している自分が、恥ずかしい。

「裾を上げろ。膝まででいい。それ以上は、俺が上げる」

言われるままに両手で裾を掴み、ゆっくり上げる。白い肌が、灯りの中に現れる。土方の視線が、ふくらはぎ、膝、太腿の内側へと降りていく。私は顔を背けた。

「見るな、とは言わん。お前が見られる側だ。目を開け。俺の顔を見ろ」

無理やり視線を合わせる。土方の目は、熱を持っていた。冷たい声のまま、瞳だけが熱い。

「もう少し上げろ」

裾が腿の付け根まで来る。下着は、薄い白いものだ。すでに中央が、わずかに色を変えている。土方はそれを見て、小さく息を吐いた。

「濡れているな」

「ち、違います。汗が……」

「嘘をつくな。帳面の誤りに続いて、嘘か」

土方は立ち上がった。私の前に立ち、片手で裾をさらに上げる。もう片方の手で、下着の紐に触れた。軽く引くだけで、布がずれる。私の陰部が、冷たい空気に触れた。

「閉じるな」

太腿を閉じようとした瞬間、土方の靴先が私の足の間に入った。開かされる。陰唇が内側で触れ合う感触が、自分でも分かった。すでに熱く、ぬるぬるしている。

「ここだな。誤りを記した女の、本当のところは」

指先が、下着の上からではなく、直接、割れ目に沿った。上から下へ、ゆっくり。クリトリスの包皮の上を、一度だけ撫でる。私は声を殺して身を震わせた。

「敏感だ。普段から、自分で触っているのか」

「していません」

「していないのに、これほど濡れる。罰を受けることを、体が待っていたということか」

指が陰唇を左右に開き、膣口を露出させる。愛液が糸を引き、土方の指に付着した。土方はそれを、灯りの下で確かめるように見た。

「よく見ろ。お前の穴が、俺の指を欲しがっている」

「見たくありません……」

「見ろ」

私は下を見た。自分の膣口が、ひくひくと開閉している。恥ずかしい形を、土方に見せている。指が入口を一周し、中指の第一関節まで、ゆっくり入ってきた。

「あ……」

「声を出すな、と言ったはずだ」

中に入った指は、すぐに動かない。ただ、中の熱と濡れを測るように、壁に沿って存在を主張するだけ。私の内側は、それを締め付けてしまっていた。

「正直だ。帳面では嘘をつく癖があるのに、ここは正直だ」

指が少しずつ深さを増す。第二関節、そして根元近くまで。土方の指は長く、骨がある。膣壁を内側から押し広げられる感覚に、膝が笑う。

「立つんだ。落ちるな」

片手で私の腰を支え、もう片方の指を抜き差しし始めた。ゆっくり、角度を変えて。天井側をこすると、私の中が勝手に汁を出した。音がする。ぬちゃ、という小さな音。

「聞こえるか。お前の穴が、俺に挨拶している音だ」

「やめて……見て、いないで……」

「見る。罰だ。誤りを犯した女は、どこがどう反応するか、全部見られる」

指がのスポットらしい場所を、繰り返して押した。私の視界が白く点滅する。クリトリスは、まだ直接触れていないのに、包皮の中で脈打っていた。乳首も、着物の内側で布に擦れて痛いほど立っている。

土方は指を二本に増やした。入り口が引き伸ばされ、愛液が溢れて太腿を伝う。土方はそれを、親指でクリトリスの包皮を剥くように上へ寄せ、露出した赤い核を、軽く弾いた。

「ひっ……!」

「まだ許していない」

弾く速さは一定ではない。時々止め、時々連続で。膣内の指は、その間も深く、子宮口の手前で円を描く。私は土方の肩にすがり、呼吸だけを整えていた。出せない。出したら倍になる。なのに体は、もう限界の形をしていた。

「土方さま、もう……中が、変です」

「変、ではない。正しく開発されているだけだ。お前の穴は、罰を受けている最中に、快楽を覚え始めている」

指の動きが速くなった。抜き差したびに、陰唇が外にめくれ、また戻る。クリトリスはもう、包皮から完全に顔を出して、土方の親指の腹に直接擦られていた。熱い。脈がある。自分の脈と、土方の指の脈が、中で重なる。

「イくなら、許可を取れ」

「イ、かせて……ください……」

「まだ早い。もう少し、誤りを思い出させろ」

土方は指を根元まで入れたまま、内側の壁を強く押した。同時にクリトリスを、指の腹で押し潰すように転がす。私の腰が勝手に前へ出た。土方の手のひらに、自分の陰部が押し当たる。

「お願い……もう、出して……中が、締まって……」

「いけ。ただし、俺の目を見てだ」

目を合わせた瞬間、内側が波を打った。膣壁が土方の指を吞み込み、離さない。クリトリスが小さく跳ね、熱いものが尿道のあたりまで上がってくる。私は声を殺したまま、脚を震わせて絶頂した。愛液が土方の手を伝い、畳に落ちる音がした。

土方は指を抜かなかった。絶頂の最中も、中をゆっくり掻き回している。余韻で締まるたびに、指が当たる場所が変わって、また小さく痙攣する。

「一回目だ。帳面の誤りは、これで消えたと思うな」

指を抜くと、膣口が閉じきれずに開いたまま、糸を引いた。土方は自分の指を、私の目の前に出した。光る液体が、関節までかかっている。

「舐めろ」

「え……」

「自分の汁だ。罰を受けた証拠を、自分の舌で確認しろ」

私は顔を赤くしたまま、土方の指を口に含んだ。塩気と、自分の匂い。土方は指を奥まで入れ、舌の上で二度、三度、動かした。

「上手だ。口も、穴と同じで正直らしい」

指を抜くと、土方は着物の裾を下ろしてやった。ただし下着は、ずらしたまま。陰部が布に直接当たらない状態で、私は立たされていた。

「帰れ。声は出すな。顔も、整えてから廊下へ出ろ」

私は帯を結び直し、襦を開けた。廊下は静かだった。自分の太腿の内側が、まだぬるぬるしている。歩くたびに、愛液が糸を引いて落ちそうになる。

土方の部屋の明かりが、背中に残っていた。

帳面の誤りは、確かに私の不注意だった。だが今、体の奥に残っている熱は、誤りよりも深く、私を土方歳三という男に結び始めていた。

明日、また呼ばれる。そのとき私は、今夜よりも内側が開いた穴で、彼の前に立つことになるのだろう。

第二章 朝の検分

夜が明けても、太腿の内側は乾いていなかった。薄い下着を正し、着物を着直しても、歩けるたびに昨夜の指の形が内側に残っている気がした。竈に火を入れ、味噌汁を仕込み、米の研ぎ汁を捨てる。いつもと同じ朝なのに、手元が何度も止まった。

土方は本陣の縁側にすでに出ていて、湯を飲んでいた。黒い羽織、整った横顔。視線が一度だけ、台所口の私に触れて、すぐに外れた。呼んでいない。昨夜「明日の帳簿は俺が直接見る」と言ったただけだ。

朝食の配膳が終わり、隊士たちがそれぞれの詰め所へ散ったあと、沖田が来た。

「花奈乃、副長が帳簿を持って来いと」

またあの部屋だった。襖を閉める音が、昨夜より大きく聞こえる。土方は机に向かったまま、手を伸ばした。私は帳簿を渡す。指先が触れた瞬間、昨夜あの指がどこまで入っていたかを、体が先に思い出した。

土方は黙って三枚めくる。墨の跡を爪でなぞる。

「今朝の米は合っている。野菜もだ」

「はい。昨夜のうちに、全部やり直しました」

「やり直した、か」

帳簿を閉じる音が短い。土方は椅子ではなく、座卓の向こうから立ち上がり、私の前に来た。

「数字は合っている。だが、体は合っているか」

「体、ですか」

「昨夜、許可を出して一度いかせた。余韻が残っていれば、今日の仕事に差し支える。検分する」

「ここで、ですか」

「襖は閉めた。声の大きさは、昨夜と同じだ。今日は指を2本にする」

膝がすくんだ。土方は私の帯に手をかけ、自分で解いた。着物が緩む。襦袢の合わせを左右に開き、胸を露出させる。冷たい空気が肌に触れた瞬間、乳首がすでに立っていた。薄い茶色の乳輪が縮み、先端だけが硬く尖っている。

「昨夜は下だけだったな。今日は上も見る」

土方の指が、右側の乳首を摘まんだ。強くはない。摘まんだまま、ゆっくり捻る。乳輪の皺が指の腹に吸いつく。左側も同じように摘まれ、両方を同時に外側へ引っ張られた。

「痛いか」

「……熱い、です」

「正直に言え。痛いのか、気持ちいいのか」

「両方、です」

土方は片方の乳首を口に含んだ。舌先が先端を叩き、歯で軽く挟む。吸い上げられるたびに、下腹部がきゅっとなった。反対側は指で弾かれ続ける。唾液で光った乳首が、灯りの下で赤く腫れていく。

「胸も正直だ。帳面より先に、ここが反応している」

土方は顔を離し、腫れた乳首を指で押し潰すように転がした。私は唇を噛んで声を殺す。下はもう、昨夜の下着の中央が再び色を変えていた。

「裾を上げろ。自分でだ」

両手で裾を膝上まで上げ、さらに指示されて付け根まで。下着は土方が親指で横にずらす。陰唇がすぐに開いた。昨夜よりも愛液が多く、糸が太腿の内側まで落ちていた。

「朝からこれか。数字は合っている、穴は昨夜のまま開いている」

中指が、抵抗なく根元近くまで入った。ぬちゃ、と音がした。土方は指を入れたまま、私の顎を上げさせる。

「中を見せろ。自分で陰唇を開け」

恥ずかしい。指で左右の唇を開き、膣口を土方の目の前に差し出す形になる。中指が埋まったまま、入口がひくひくと動いているのが自分でも見える。

「昨夜より赤い。開発が進んでいる」

指が二本に増えた。入り口が引き伸ばされ、のスポットのあたりを上向きに搔く。同時に親指がクリトリスの包皮を剥き、むき出しの核を直接、縦に擦った。

「ひっ……土方さま、そこは……」

「そこだ。昨日より敏感になっている。包皮の下に隠していた核が、もう顔を出したがつている」

擦る速さが変わる。遅いときは核の裏側の筋を丁寧、速いときは包皮の縁まで含めて潰すように。膣内の二本は、子宮口の手前で止まる深さを保ったまま、壁を押し広げる。愛液が指の根元から溢れて、土方の手のひらを濡らした。

「イきそうなら言え。無断で出すな」

「もう、近いです……中が、締まって……」

「まだ早い。胸も同時に責める」

土方は空いている手で、腫れた乳首を再び摘み、引っ張った。搾るように上下させる。三点が同時に責められ、視界の端が白くなった。

「いかせて、ください……お願いします……」

「目を開け。俺を見て出せ」

目を合わせたまま、内側が波を打った。膣壁が二本の指を呑み込み、クリトリスが親指の下で小さく痙攣する。熱いものが尿道口まで上がり、少量の愛液が吹き出すように溢れた。膝が折れかけるのを、土方の腕が支えた。

「一回目だ。まだ検分は終わっていない」

指は抜かれなかった。絶頂で締まるたびに、内側をゆっくり掻き回される。余韻が消えないうちに、動きが再開した。今度はより深く、第三関節まで。子宮口に指先が当たる感触が、鈍い痛みと快感を同時に送る。

「奥まで入れる。昨日は遠慮した。今日は帳面が合っていた代わりに、体の奥を確認する」

指が子宮口を押し、円を描く。私の中はそれを拒否できず、さらに汁を出した。音が大きくなる。ぬちゃぬちゃと、部屋に響く。

土方は突然、指を抜き、私を机の端に座らせた。裾を腰までまくり、脚を開かせる。顔を近づけ、息が陰部に当たった。

「見るだけではない。味も検分する」

舌が割れ目を下から上へ舐めた。広い舌面が陰唇もクリトリスも一度に覆い、先端だけが核を弾く。私は机の縁を掴んで身を反らした。土方は陰唇を指で開き、膣口に舌を突っ込んだ。中を掻き出すように動き、愛液を音を立てて飲む。

「甘い。昨夜より濃い」

舌がクリトリスに戻る。包皮を完全に剥き、核だけを唇で挟んで吸う。弱い吸引と、時折の歯の感触。下から中指が再び入り、舌と指が内側と外側から同じ場所を挟む形になった。

「いくな。二回目は、俺が吸っている最中に許可する」

吸われるたびに、核が舌の上で脈打つ。指はのスポットを短く叩くように動く。私の腰が土方の顔に押し付けられそうになるのを、土方が両手で腿を押さえて止める。逃げられない。見せたまま、吸われたまま。

「土方さま……もう、無理です……いかせて……」

土方は顔を上げず、核を含んだまま小さく頷いた。それが許可だった。二度目の絶頂は、口の中で核が跳ね、膣が指を締め、自分でも止められない声が喉の奥で潰れた。土方は絶頂の最中も吸い続け、溢れる汁を舌で受け止めた。

息が上がったまま、私は机に上体を預けた。土方はゆっくり顔を離し、唇の端を自分の指で拭いた。その指を、また私の口に持ってくる。

「二回分だ。飲め」

自分の味が、昨夜より濃く、土方の唾液と混ざっていた。指を根元まで含まされ、舌で掃除させられる。土方はそれを見て、初めて小さく息を吐いた。

「検分は合格だ。ただし、下着は今日一日、ずらしたままでもいい。歩くたびに、空気が当たる。それが今日の罰だ」

「ず、ずらしたまま、仕事を……？」

「台所に立て。誰にも見せるな。見せたら、次は俺の前で脚を開いたまま味噌汁を作れ」

帯を結んでやりながら、土方は私の耳元で言った。声は低いまま、熱だけが残る。

「数字が合っていても、体は俺が管理する。忘れたら、また呼ぶ」

襦を出るとき、下着は左に寄せられたままだった。陰唇が布に隠れきれず、歩くたびに冷たい空気がクリトリスに触れた。愛液が新しい糸を引き、太腿を伝う。

竈の前に立っても、下腹部の脈は止まらなかった。土方の舌の形が、核の上に残っている。今日一日、誰にも知られずに、私の穴だけが副長に開いたまま仕事をすることになる。

帳簿の数字は合っていた。なのに体の奥は、すでに土方歳三の検分に合格する形へ、少しずつ変えられていた。

第三章 空気の当たる罰

下着を左へ寄せたまま、私は一日を過ごした。

竈の前に立つと、炎の熱が顔に当たるのに、下半身だけが妙に冷たい。歩くたびに、ずらされた布の端が陰唇の片側だけを擦り、反対側は何も覆われない。空気が直接、むき出しのクリトリスに触れる。朝、土方の舌で吸われた核はまだ腫れていて、わずかな風でも脈を打った。

味噌汁を漉すとき、腰を落すと、愛液が新しい糸を引いて太腿を伝った。誰にも見られていない。なのに見られているような気がして、何度も裾を確かめた。隊士たちが「今日の味噌汁、いつもより塩が薄いぞ」と笑う声が、遠くに聞こえる。私は微笑んで答えながら、内側では土方の指の形を数えていた。

夕方、洗い物が一段落したところで、また小姓が来た。

「副長が、検分の続きだと言っています」

続き。あの言葉だけで、下腹部がきゅっとなった。帳簿は持っていない。体だけが呼ばれているのが分かった。

土方の部屋に入ると、すでに灯が点いていた。土方は机に向かわず、座卓の上に片足を乗せたまま私を待っていた。羽織は脱いでいる。白い襦袢の胸元がわずかに開き、鎖骨の影が見える。

「一日、ずらしたままだったな」

「はい」

「歩いて、濡れたか」

私は黙って頷いた。土方は手を伸ばし、私の裾を自分でまくり上げる。下着は朝の位置のまま、左に寄っている。右側の陰唇とクリトリスが、完全に露出していた。愛液で光り、包皮はすでに上がったまま戻っていない。

「よく我慢した。誰にも見られなかったか」

「見られていません」

「見せなかったただけだ。穴の方は、一日中俺に見せる準備をしていた」

土方は私を座卓の前に跪かせ、後ろから帯を解いた。着物が肩まで落ち、襦袢だけになる。後ろから胸を掴まれ、乳首を指の腹で潰された。朝に吸われて腫れた先端が、すぐに硬くなる。

「立って、机に手をつく」

言われるままに前かがみになる。土方は後ろに回り、裾を腰まで上げた。掌が右の尻に乗ったと思う間もなく、乾いた音がした。

「っ……」

「声を出すな。これは昨日の帳面の、残りだ」

次の平手が、同じ場所に落ちる。熱が広がる。三打目で左側。交互に、リズムを変えずに十まで。皮膚が熱くなり、陰部が勝手に開いて、愛液が糸を引いて床へ落ちた。

「十だ。まだ赤いだけだ。次は中を見る」

土方の指が、ずらされた下着の隙間から三本、一度に入口を押し広げた。朝の二本より明らかに太い。入り口が白く引き伸ばされ、第三関節まで埋まる。子宮口に指先が当たる深さ。

「三本だ。昨日、声を出したらこうすると言ったな。出していないのに入れる。それが今日の検分だ」

三本が揃って抜き差しされる。ぬちゃぬちゃと音が大きく、私の中がそれを締め付けてしまう。土方は空いている手でクリトリスの包皮を完全に剥き、核を指の腹で横に弾いた。

「一日、空気に当てておいた核だ。直に触れば、すぐイク」

「まだ、許可が……」

「許可は俺が出す。お前は数えるだけだ」

三本の指がGスポットを集中して叩く。同時に核が弾かれ続ける。私の腕が机の上で滑った。乳首が机の木目に擦れ、痛いほど立っている。

「一回目、いい。ただし、三本を締めながらだ」

許可と同時に内側が逆らいきれず、波を打った。三本を根元まで飲み込んだまま、膣壁が痙攣する。クリトリスが弾かれた拍子に、少量の汁が土方の手首まで飛んだ。土方は抜かずに、絶頂の収縮を全部指で受け止めた。

「一回。まだ硬いな、核が」

指を抜くと、開いた膣口から愛液がとろりと溢れた。土方は私を向き直らせ、座らせる。自分は立ったまま、袴の紐を解いた。白い襦袢の下から、すでに勃起した陰茎が現れた。包皮は半分上がり、亀頭が赤く濡れている。裏筋が脈を打って見えた。

「見るだけだ。今日は入れない。口で。」

私の顔の前に、熱いものが来た。匂いが濃い。土方は亀頭を私の唇に当て、動かない。

「舐めろ。裏筋から」

舌先で裏筋をなぞる。土方の息が一度、短くなった。亀頭の中から透明な液が出て、舌に乗った。塩気と熱。私はそれを飲み込み、包皮の残った部分を舌で押し上げて、全体を露出させる。

「上手い。穴と同じで、口もすぐ覚える」

土方は後頭部を押さえず、ただ見ている。私は亀頭を含み、浅く吸った。舌で裏筋を擦りながら、ゆっくり奥へ。喉の手前で止めると、土方の指が顎の下に入った。

「無理をするな。今日は先端だけでいい。歯を立てるな」

吸うたびに、土方の陰茎が舌の上で脈を打つ。私の下は三本で開かれたまま、新しい愛液を垂らしていた。土方は靴先で私のクリトリスを軽く踏むように押し、核を靴の腹で転がした。

「口を動かしながら、下もイけ。二回目だ」

靴の圧力と、口の中の熱が同時に来た。私は亀頭を含んだまま、二度目の絶頂で腰を震わせた。声が陰茎に直接当たった。土方は低く息を吐き、亀頭からまた液を溢した。それを全部、舌で受け止める。

「飲め。出すな」

私は喉を鳴らして飲み込んだ。土方は陰茎を唇から離し、残った液を亀頭で私の乳首に塗りつけた。熱い筋が乳輪に残る。

「今日はここまでだ。下着は戻せ。ただし、今夜は洗わずに寝ろ。俺の指と舌と、この液の匂いをつけたまま朝を迎えろ」

袴を整えながら、土方は私の顎を上げた。唇は重ねない。額に、昨夜と同じように端だけを当てる。

「数字は合っていた。体も、少しずつ合ってきた。明日は、俺が台所を見に行く。ずらしていないか、自分で確かめるな。俺が確かめる」

襦を出るとき、下着を正しい位置に戻した。なのに布の中央はすぐに濡れ、土方の先走りの匂いが、自分の愛液に混ざって残った。

一日中、空気に当てられて腫れた核が、布の内側でまだ脈を打っている。三本で開かれた穴は、閉じきらずに熱を含んだままだった。

土方歳三の検分は、帳面から体へ、体から匂いへ、少しずつ私の日常を占領し始めていた。

第四章 竈の前で

朝、下着を替えた瞬間に分かった。布の内側に残っていた匂いが、自分の愛液だけではなかった。土方の先走りが乾いて、薄い膜のように太腿の付け根に張りついている。洗わずに寝ろと言われた通りにした罰が、肌に残っていた。

竈に火を入れ、米を研いていると、背後に気配がした。振り返る前に、低い声が落ちる。

「ずらしていないな」

土方だった。羽織のまま台所に立っている。朝の隊士たちはまだ縁側で顔を洗っている時間だ。誰もここまで来ない。それでも私の手が止まった。

土方は何も持っていない。帳簿も、紐も。ただ私の裾のあたりを見ていた。

「自分で確かめるな、と言ったはずだ」

「確かめていません」

「嘘だ。今朝、布を当てたとき、匂いを嗅いだだろう」

言い当てられて、耳まで熱くなった。土方は竈の横まで歩み、私の腰の後ろに立った。両手で裾を静かに上げる。誰かに見られたら終わりの高さまで。下着の中央を親指で押し、布越しにクリトリスを確認した。

「腫れたままだ。昨夜、靴で転がした核が、まだ出ている」

布の上から核をゆっくり円で撫でる。火の熱と、土方の指の熱が同時に下腹部へ落ちた。私は研ぎ汁の入った桶を握ったまま、動けなかった。

「声を出すな。誰かが来る。出したら、この場で脚を開かせる」

指が下着の脇から入り、直接、陰唇を左右に分けた。中指が抵抗なく二関節入る。朝からすでに濡れていた穴が、土方の指を飲み込んだ。ぬちゃ、と小さな音が竈の燃える音に紛れる。

「浅い。昨夜三本入れた穴が、朝にはこれか。まだ足りない」

指を抜かず、土方は私の右手を桶から離させ、自分の袴の前に回した。硬いものが、掌に当たった。すでに勃起している。布越しでも脈が分かる。

「握れ。弱くていい。火を見ながらだ」